



一人は皆のために 皆は一人のために

わだち

福脊連通信
2025.1
No. 220

編集：福岡県脊髄損傷者連合会 〒 820-0303 福岡県嘉麻市中益 879 TEL 090-1346-0093



▲大会後、皆で集合写真

昨年は、大分で九州ブロック会議が開催され、九州各県から仲間が集いました。今年の開催地は、地元福岡です。皆様のご協力をよろしくお願いいたします。



今年度の活動に向けてそして織田さんを偲んで	2 P
福脊連の歩み	3 P
九州ブロック会議大分県大会が開催される	4 P
24年度要望活動(省庁交渉)～福岡県支部の要望への回答～	5 P
福岡空港国際線のバリアフリーチェック	6 P
【連載】新入会員投稿	7 P
【連載】新入会員投稿・編集後記	8 P

今年度の活動に向けて そして織田晋平さんを偲んで

支部長 大里 恵

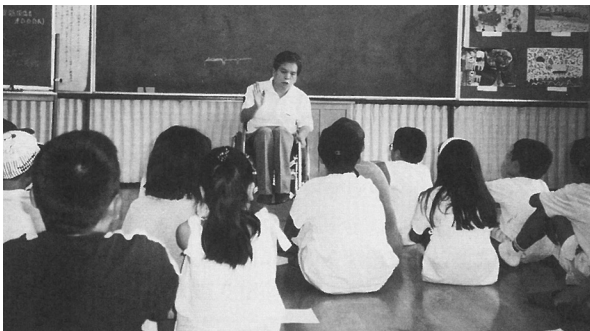
みなさま新しい年を迎えられ、元気でお過ごしでしょうか。さて、今年度最大の活動となる九州ブロック会議が福岡支部で10月頃開催される予定です。詳細は後日「わだち」等でお知らせ致します。久しぶりの福岡開催となり、コロナも収束方向にあるので、多くの方の参加ご協力をお願い致します。

そして大変残念なお知らせです。昨年末、福脊連を長きにわたり牽引されてきた織田晋平さんが逝去されました。

私は24歳で事故に遭い、3年近い病院生活の後、福脊連に入会しました。あれから40年近く経ちますが、入会当時は障害者福祉については全くの素人でした。当時会長だった織田さんに会い、障害者福祉や労災についてのイロハを学ばせていただきました。時には厳しく侃々諤々意見を交わし私も徐々に成長させていただきました。

全脊連全国大会・九プロ大会などで神奈川・栃木・沖縄・鹿児島・宮崎・大分など同行して、更なる経験を積ませていただきました。今の私があるのは織田さんのお陰といっても過言ではありません。

福脊連の歩みより



体験講座で「障害」とは何だろう…話しをする織田会長
1995年8月8日 吉岐東校社会福祉協議会主催

私は訳あって会活動は15年ほど休止状態でしたが、一昨年福岡で2回目の全国大会が開催されることを聞き、動ける会員も限られており、大会を何とか成功させなければと思いで大会準備にあたりました。

全国大会当日、織田さんご夫婦が駆けつけて下さって、久しぶりにお会いできた。会議では織田さんは腕を組んで、真剣な眼差しで話に聞き入っていました。その姿は昔の元気な織田さんでした。その後奥さんと30分ほど話し込み、織田さんの状況をお伺いし、驚きを隠せませんでした。

そしてあの日、織田さんの姿を見るのが最後になるとは今でも信じられません。今思えば全国大会の運営に参加しなければお会いすることも無かったかもしれません。最後に織田さんが脊損連合会活動に一生を捧げられ、ご活躍されたことは脊損連合会のみならず、福岡の福祉関係者の皆が知るところです。織田さんが残された功績は福岡の障害者福祉の発展に大きく寄与されたことは何時までも関係者の心に刻まれています。福脊連会員一同心からご冥福をお祈りします。

福脊連の歩みより



国障年・人権週間パレード

福脊連の歩み

当会及び九州ブロック会議の結成時からご尽力いただいた初代会長の織田晋平さんがまとめられた「福脊連の歩み」から一部抜粋した記事を紹介いたします。織田さんの功績の大きさを改めて感じます。

はじめに

福脊連の発足から今日までの歩みについて紹介いたします。

ただし、ここに紹介することは、活動経緯の概略に過ぎませんので、その旨ご承知おきをお願い致します。

お読み下さる方々が会の活動経緯を現在から過去へ、過去から未来への道筋を探る、その素材の一端となればとの思いでまとめましたので、「わだち」の抜粋記事と合わせて御拝読をお願い致します。

会結成時 1978年

当会のはじまりは、九州労災病院、筑豊労災病院、個人病院、在宅者に対して、1978年の3月頃から全脊連福岡県支部の結成を呼びかける訪問活動を行い、各病院での懇談会を重ねて賛同者を募り、同年12月3日に「結成準備会」を発足させ、79年（昭和54年）4月15日に結成大会に至ります。（加入者102名）

なお、78年9月頃に行われた、全脊連第2回九州ブロック会議・宮崎大会には織田、土井がオブザーバー参加しています。

※（当会よりも2年前に個人病院入院者を中心とした脊損者で「脊損同志会」という会が結成されています。約120名）

当会の結成の至要因は1974年頃を境に、脊損者の入院期間が次第に短縮され1年～2年未満で退院し、自宅もしくは公営住宅、民間住宅で生活する人が増加してきたことと深い関係があると言えます。車イス使用者の住宅はこれまで「改造住宅（一部改造する）」が主でしたが、



▲昭和26年頃九州労災病院

写真提供者
九州リハビリテーション大学 橋本隆教授

◀昭和31年頃の入院患者院

75年以降には「専用（バリアフリー）住宅」の建設がはじまります。こうして地域で生活をはじめめる人が増加することで、社会の物理的なバリアと心の（意識）バリアという現実の「問題」を突きつけられますので問題解決の道筋を求める要求が内包されていた時代であったと言えます。

また、「障害者の福祉」の政策も転換期を迎えていた時代でもあったともいえます。〔73年（S48）厚生省・福祉モデル都市宣言〕

結成大会における活動方針は、まず会員が抱える「問題・課題」のほり起こしとしてアンケート調査と会員が暮らす地域や町、街の環境を含めた「生活実態調査」の取り組みを行い、これらを整理し関係機関への働きかけを進めることとなります。この頃は、公共施設においても未整備であったことは言うまでもありません。

（中略）

2000年

あと、半年で21世紀の始まりです。これからの5年～10～15年を、何をどのように変革するのか、何をめざすのか、まずは、それぞれの課題を射程距離においてほしいと思います。何事も志しありきであり、思いを主張し、行動をおこし、人間として同時代を生きるもの同志として、21世紀を歩きはじめようではありませんか。

以上で福脊連の歩みの紹介とします。



九州ブロック会議大分県大会が開催される

東 聖二

2024年10月26日、日田天領水の宿にて第48回九州ブロック会議大分県大会が開催されました。当会から大里会長と東が参加。九州各県から宮崎、熊本、沖縄、鹿児島（Zoom）、佐賀（Zoom）の参加がありました。

大会前日は、同ホテルで夕食を兼ねた懇親会が開催。日田の名物、鮎の塩焼きなど堪能しながら久しぶりに各県支部の皆様と旧交を温めることが出来ました。

大会当日の午前中は、開会式の後に総合せき損センター副院長の河野修氏より「脊髄損傷医療の現況と問題点および今後の課題」と題して



基調講演

基調講演がありました。

総合せき損センターの設立の経緯及び現在の問題点と課題について講演をし

て頂きました。

現在は、合併症を持っている高齢者が夜中の転倒等で不全麻痺になる方が増え、内科の治療が難しいという問題点も指摘されました。

また、手術時期が早くても麻痺の有意性はないというお話もあり、大切なのは褥瘡を予防し早期にリハビリを行うことです。と語られました。

総合せき損センターの紹介のなかで患者同士が経験を伝え合う様子のスライドがありました。講演後の質疑応答でも、ピアサポート活動につ

いて総合せき損センターとの連携に関する質問があり、先生から「総合せき損センターが起点となって交流というか一緒に出来たらと思います」と話されました。

今後、総合せき損センターとの連携に繋がる貴重な講演会になったと思います。



午後からは、議題 大里副議長、高原議長に沿って各支部の報告がありました。

各県支部とも会員の高齢化、会員数の減少、コロナ禍の影響もあり活動が停滞している状況が報告されました。その後、本部提案についての報告、会計報告などがあり、全ての議案が承認され、大分県大会を無事に終わりました。

大会運営にご尽力頂きました大分県支部の皆様、本当にありがとうございました。

大会後は、久しぶりに日田の歴史ある豆田町の町並みを散策して帰途に着きました。

今年は、福岡県で開催されます。皆様のご参加をよろしくお願いいたします。



川辺にたたずむ日田天領水の宿

24 年度要望活動（省庁交渉）

～福岡県支部の要望への回答～

脊損ニュースにも掲載されていますが、24年度の要望活動に基づく省庁交渉が実施され回答が出ました。福岡県支部の要望、回答などについてご報告いたします。

当支部では、省庁交渉の要望について、以下の4項目を提案し要望①②について取り上げて頂きました。

要望事項

①有料道路の障害者割引制度オンライン申請をパソコンでも利用できるようにしていただきたい。（現在はスマートフォンのみの申請）

②移動支援事業の外出範囲の拡大

通勤、通学、宿泊を伴う外出等が制限されている。重度訪問介護の外出では、報酬告示が改正され、泊りがけの外出が認められた。

③日常生活用具の特殊マットの上限額の引き上げ

④手動車いすと電動車いすの併給等

補装具の個数が、原則1種目につき1個であるため、社会参加が制限されている。

<要望①回答>

PC申請については、「PCでの申請を可能とするための改修については、引き続き運用状況を確認しつつ、利用者の利便性向上のための優先度等を踏まえ、検討を行う必要がある」という回答でした。

<要望②回答>

移動支援事業については、「市町村事業なので国から対象範囲を示すことは慎重な検討が必要。

日をまたぐ利用についても市町村事業なので自治体で判断されるものですが、報酬改定について十分に認識していないことも考えられるので全国会議等で周知していきたい」という回答でした。

要望（沖縄県支部）

日常生活における紙おむつの支給について、脊髄損傷を対象とすべき旨を、市町村に通知していただきたい。

<回答>

「国として紙おむつの支給について脊髄損傷者への給付を禁じていませんので、その旨をお住まいの市町村担当に丁寧にお伝え頂きご相談頂くようお願いします。」という回答でした。

省庁交渉の結果を見ると、「検討する」という回答に終始していたように思えます。しかし、沖縄県支部等から提案された日常生活用具給付事業の紙おむつの給付については、「脊髄損傷者の給付を禁じていません」という回答があり、今後の取組みに活かされると思います。

今後、65歳問題、重度訪問介護の制度改正、バリアフリー等の課題を解決するためには引き続き、要望活動の取組みを進める必要があります。

会員の皆様のご提案をよろしくお願ひいたします。

福岡空港国際線のバリアフリーチェック



2024年11月28日、全国各地でバリアフリーチェックを行っている大久保健一さんから呼びかけがあり福岡空港国際線のバリアフリーチェックを行いました。参加者は、当会及び自立生活センター関係者4名でした。

福岡国際空港は、2年前に国際線ターミナルを増築し、新たにコンコースが整備された際にバリアフリーチェックを行いました。

今回は、福岡国際空港ターミナルビル1階到着ロビーの増改築工事に伴いバリアフリーチェックを行いました。到着ロビーが3倍に拡張され、バスターミナル機能を持ったアクセスホールと国内線・国際線を結ぶ連絡バスの専用道が12月3日から開始されました。

アクセスホールは、広々とした空間でゆっくり路線バス、高速バスの待ち時間を過ごせるように整備されています。

まず、気になったのはバス案内カウンターの高さです。車いす使用者の視線と同じくらい高さで使いづらいカウンターでした。車いす使用者に配慮した低いカウンターと荷物を置く台の設置、さらに案内担当者の車いす使用者に対する配慮についても伝えました。なお、中央にある案内所には、低いカウンターが設置されました。

次ぎに未だ工事中でしたが、3階の出発口までエレベーターに乗せて頂きました。車いす使



案内所の低いカウンター

用者4名が乗れる十分なスペースがでした。

来年3月には、保安検査場拡張や免税店・フードコート等のオープンを予定しています。引き続き、バリアフリーチェックを行う予定です。

これからも障害当事者の視点から建設的な対話を重ね、少しでも改善出来るよう働きかけていきたいと思います。

(東 聖二)



エレベーター

【連載】 新入会員投稿

児玉 良介

●アメリカ留学挑戦

年が明けて 1996 年 1 月、私は初めての東京へ行った。初めての 1 人旅でもあった。家を出てから新宿のホテルに着くまで 5 時間かかった。途中、車椅子の後ろに引っかけたリュックの重さでひっくり返りそうになったり、行き先の違うバスに間違っ乗ってあわてて降りたり、坂道で車椅子からずり落ちそうになったりと、かなり危ない目あったが、なんとか無事だった。愛の輪運動基金という団体が行っているダスキン障害者リーダー育成海外研修派遣事業に、私は応募をしていた。当時この事業では、毎年 10 名ほどの障害者が、海外へ留学や研修で派遣されていた。

私はアメリカの自立生活センターでの研修を望んでいた。自立生活センターはもともとアメリカで生まれたもので、現在では数百ものセンターが全米各地に存在する。私は本場の自立生活センターを見てみたいという気持ちを以前から持っていた。

新宿では 1 泊し、東京の自立生活センターに頼んで泊まりの介助者を派遣してもらった。翌日、再びバスと電車と飛行機を乗り継ぎ、へとへとになってわが家に帰りついた。そのかいもあってか、1 週間ほど後、私の元に合格通知が届いた。

受け入れ先がなかなか決まらないなどして、実際私がアメリカへと発ったのは、合格が決まってから 1 年以上後の 1997 年 3 月下旬だった。私はセントルイスにある全米でも大きな自立生活センターで、1 年間の研修を行うことになった。

私はスチュアートという電動車いすに乗った障害者と一緒に住むことになり、介助者は、ミルトン、ロバート、ジェームスという 3 人を雇うことになった。

なんとかスタートしたアメリカ生活だったが、トラブルは待っていたかのようにやってきた。まずは、「介助者による窃盗事件」。介助者の 1 人、ジェームスは、私の目を盗んで財布から現金を抜き取っていた。介助の方もかなり問題のある人で、早々に解雇することになった。雇ってまだたったの 2 週間だった。

次は、「お尻の傷による研修延期事件」。これもまた、生活が始まって 2 週間くらいのときで、介助者が私の体を便器かシャワーチェアに移動させるときに、私のお尻をどこかにぶつけてしまったようだった。出血しており、へたをするとじょくそうになる恐れがあった。このことで、私は 1 か月以上、ベッドで寝たきりの生活を送らなければならず、研修はなんと 3 か月近くも遅れた。

そして 3 つ目は、「入国手続きミスで不法滞在事件」。ロサンゼルスで入国する際、私はビザを所持していること審査官にきちんと伝えられていなかった。そのため、ビザなしの入国となっており、3 か月を過ぎた時点で、不法滞在者となっていた。研修先が手を尽くしてくれて、なんとか研修を続けられるようになった。

他にも、ルームメイトが意識不明の重体で病院に運ばれたり、電動車椅子のモーターが故障して動かなくなったりと、実にトラブルの多いアメリカ生活だった。

さて、メインである研修の方だが、本場アメリカの自立生活センターの様々な事業を学ぶことができた。でも、一番の収穫というのは、障害者との出会いだった。センターの所長は、マックス・スタークロフという60才の大柄の頸随損傷者で、これまた大きな電動車椅子に乗っていた。

彼は21才の時、交通事故で障害を持ち、24才から37才までの13年間、養護施設での生活を余儀なくさせられた。その後、施設を出て結婚し、障害者の自立生活運動を本格的に始め、設立した自立生活センターを全米でも有数の大規模なセンターに発展させた。

セントルイスは障害者にとってとても暮らしやすいところだった。公共交通機関で言えば、ほとんどのバスには車椅子の乗客用にリフトが付いていて、運転手は運転席に着いたまま、ボタンでリフトの操作ができるようになっていた。電車の駅にはすべてエレベーターやスロープが付いていて、プラットホームまで簡単に行くことができ、また、ホームと車両の段差は全くなく、乗り降りはとても楽だった。

建物に関していうと、新しく建てられたビルなどには、入口に段差がなく、身障者向けのトイレやエレベーターが必ず付けられていた。また、住宅に関しても、キッチンやトイレ、浴室を障害者向けの作りにしたものがたくさんあった。さらには、重い障害を持っていても、大学に通っていたり、仕事に就いていたりする人が、日本に比べてずっと多くいた。

マックスのやってきたことを見たとき、障害を持っていてもこれほどのことができるんだと思い、ぜひとも自分も日本に帰って、自分の住む街をこんな風に変えていきたいと思った。

●自立生活センター勤務

1998年の春に私は研修を終え日本にもどり、再び自立生活センターで働くようになった。通勤の様子をちょっと説明すると、毎日、電動車椅子で自宅から最寄りの駅まで約30分かかって移動する。駅から一つ先の駅まで電車に乗り、その後、センターの事務所まで約15分かけて移動する。総時間約1時間半。これでもなかなか大変なのだが、雨の日はもっと大変だった。

雨の日は、頭からすっぽり電動車椅子ごと隠れるような白いポンチョを着て出かけていた。手などはポンチョの中で、顔のところだけ出ている。駅まで行く途中に小学校の前を通るが、ある日小学一年生の下校時間と重なった。若い男の先生らしき人が10人くらいの子供を連れて、信号待ちをしていた。そこに私がやってきたのだが、一人の子が私の方を見て、そばにいた先生にちょっと尋ねるような感じで「何これえ？」と言った。その先生らしき人は返事にこまったのか、聞こえないふりをしていた。職場でその話をしたら、同僚が、「雨の日は学校のそばでてるてる坊主のお化けがでるって子供たちの中でうわさになるかもよ」などと言った。

編集後記

昨年は年明け早々、能登半島地震の衝撃ではじまり、世界では先の見えない紛争が激化する一年でした。

今年はどんな年になるのでしょうか。

私は市営住宅の立替えによる引越しと職場の移転が重なり何かと忙しくなりそうです。

福脊連では、九州ブロック会議が福岡で開催されます。

どうぞ今年もよろしく願いいたします。
(H)